

アクセセル・ワールド ガーネットの輝き

ニヒト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『ニューロリンカー』と呼ばれる通信端末と、その端末により生成される仮想世界が生活の中心となっていた未来

そんな数ある仮想世界の一つである『加速世界』は『ブレインバースト』プログラムによって生成され、そこに入出力できるのはバーストリンカーと呼ばれる一握りの子供達のみ

だがそんな子供しかいない世界でも思想がぶつかり、悲しみが生まれる

ある事件で心に大きな傷を負った『ガーネット』の名を冠するバーストリンカー

彼が新たなバーストリンカーを見出す時、物語は再び動き出す

※この小説は『暁』でも投稿しています

目次

Gloom 陰鬱	81
Anxiety 不安	74
Ripple 波紋	62
Inattention 油断	49
Practice 実践	33
Remove 再動	23
Finding 発掘	18
Anxiety 心配	13
Challenge 挑戦	5
Prologue 過去	1

Prologue 過去

—これは、何？なんで僕にこれを？

—そうだねえ……うん、なんとなく

—な、なんとなくって……

—まあ、あたしと君は似ている気がしたんだ。自分の意思とは関係なく、自分の大切なものを失う悲しみが……

—僕の夢は、相互救済レギオンを作ることなんだ

—なんだそれ？普通のレギオンとはどう違うんだ？

—この世界に関わる皆が、安心してこの世界を楽しめるようにするためのレギオンさ。そうすれば、あんな悲しい別れもなくなるはずだからね

—……ぷつ、あはははは

—な、何さ！笑うことないだろ！これ話したの君が初めてなんだぞ!?

—ごめ、ごめん。お前らしい真っ直ぐな考えでつい、な

—良いさ、もう……君には失望したよ。これは僕一人で実行するさ

—そんな怒るなつて、悪かつたつて。……もしそのレギオンを作る時には、一番に俺を加入させろよな

—え！ホントに!?!でも今のところ僕と君の二人だけだよ？第一メンバーが集まるかどうか分からないのに

—それがどうした、俺達が頑張つてメンバーを増やしていけば言いだけの事だしな。それに、俺達はパートナーだろ、——。

—う、うん！僕達はパートナーだしね！そうだよ、ね……パートナーだからね

—え、まさか俺とのパートナーに不満が!?!俺なんかしたつけ……

—いや、あの、その僕さ、君の事を……

—なんで……なんでアイツがいなくならないといけないんだよ！

—……ああするしかなかった、それは君にも分かつているはずだ。ああなつた以上、こうするのがここでの掟だ

—ふざけんな！俺は、あいつの夢を叶えてやりたかつたんだ！それを、お前が奪つたつて言うのが気に入らないんだ！

—……君の言い分は聞くに堪えない。この事は無かつたことにしてやるし、見逃して

やる

— 待て！ふざけんな！待てって言うてるだろ！……があああああああああああ
あ!!

— ゴメン、今日限りでこのレギオン抜ける。リアルでのこともあるけど、この前のこ
ともあるしな

— な、何を言っているんだ！確かに彼のことは残念だが、君は関係ないはずだ！君が
すべて背負い込む必要はない！

— 関係あるとかないかは関係ない。……それになあいつを見捨てたお前らなんて、
もう仲間なんかじゃない

— !? 貴様……！それは本気で言っているのか?!

— さあ、どうだろうな……ほら、別に断罪してもかまわないぞ？その方が気が楽だし
な

— つ！勝手にしろ！君はもう、うちのレギオンには所属していない！断罪はよしてや
る！

— ああ、そうか……ごめんな

彼は今までに様々な悲しみを背負ってきた

だが、それでも彼は進み続ける。これは、そんなバーストリンカーのお話

Challenge 挑戦

夕方、普通ならこの時間帯は夕日によって風景が普段の色から赤みがかったオレンジ色に変わる。

しかし、今俺の目の前に広がる風景はそんな穏やかなものではなく、ビルや家は崩れ落ち、周りに存在する電気自動車からはゆらゆらと黒煙と炎が立ち上る。

そして最も異なるのは、現実ではありえないほど巨大な生物達であった。

見た目こそ広島島の宮島に生息しているような鹿に近いが、大きさが全く違う。

一番小さいのでも6メートル、集団の長と思われる二対の角を持っている個体はゆうに20メートルは超えている。

もし現実でそんな物が存在していればかなりのニュースになるし、俺も悠長に見ている場合じゃない。

でも俺はそこまで考えた上で、俺は逃げようとは微塵も考えなかつた。何故か？

理由は単純、ここが現実ではなく仮想の空間だからだ。

その証拠に、俺自身の身体も普通の人間とはかけ離れた外見をしている。

体色は右肘から先の部分以外は少し紫に近い赤で、右肘から先は暗い紫色をしている。

て、見た目は一昔前のロボットアニメのロボットみたいな機械的なフォルムだ。

先程の大きな生物も今の俺も作り上げられた仮想的な物で、先程の生物は『エネミー』と、今の俺の姿は『アバター』と呼称される。

さらに詳しく言うと、先ほどのエネミーは『小獣（レッサー）級』と呼称されるタイプでエネミーの中では比較的弱い部類に入るがそれでもかなり強く、基本的にソロで倒すにはかなり骨が折れる。

そんな事を考えている内に巨大な鹿が俺の隠れているビルの前を通り過ぎるのを確認する。

「よし、通りすぎた。二人とも出てきて良いぞ」

確認してすぐさま、俺は柱の陰に声をかける。

すると柱の陰から二人の人影が姿を表す。二人とも俺とは対称的に、女性的なスタイルのアバターだ。

二人の紹介としては深い緑色で、小柄な体に不釣り合いなほど大きな盾を背負っている方が『イル』、俺の妹だ。

もう一人の薄い黄色で、先ほどの緑のアバターよりも少し背が高く、すらつとした体型が特徴的な方は『ミラ』だ。

ちなみに俺の名前は『アント』、決して蟻ではないし本名でもない。

「うー……ほんとにやんの?」

「今更それを言うか。さっきこの事を言ったら二人とも乗り気だったじゃん」

「いや、あれはその時の場の空気というので、本気でゆうたわけじゃ」

「そうだそうだ! 兄ちゃんと違ってあたし達はか弱い女子なんだぞ!」

「ミラはともかく、そんな馬鹿でかい盾を背負ってるお前が何を言うか」

「うっさい! これはあたしの相棒だもん! 兄ちゃんの銃と一緒にだよ!」

あゝ、我が妹ながらうるせえな……甲高い声で叫ぶんじゃねえよ。

そんな話し合い(?)をしてしていると、先程の集団からはぐれてしまったらしい小さな(とはいっても4mはある)個体が一匹、ビルの前を通り過ぎようとしていた。

それを見た俺は(表情を変えることは出来ないが)口元をつり上げると、はぐれた『エネミー』を指差しながら目の前の二人に話しかける。

「よしちようど良い、今からあのエネミーを二人で倒して来い」

『ええええええええ?!』

俺がそう軽い感じで言うのと、これまた甲高い声で叫ばれる。

エネミーに見付かってしまいそうだと思いい窓から少し身を乗り出して確認するが、ちようど水を飲んでいたので、こちらに気づいた様子はなかった。

「お前ら、そんな大声出すんじゃないやねえ！見つかつたらどうすんだよ!」

「そういう兄ちゃんこそ声おつきいよ!」

「まあまあ、アントもイルも落ち着いて。でも、流石に二人だけじゃ無理ちゃうん?」

「はあ、はあ…確かに小獣級を二人だけではきついだろう。だから」

そこまで喋つた上で、俺は上を指差しイルもミラもそれに吊られて上を見るが、俺の意図が分からなかつたようで首をかしげていた。

「……このビルがどうかした?」

「このビルって結構大きいだろ?それを利用するんだ」

「……すいません、ようわからんのじゃけど」

「だーかーらー、屋上は周りが見えやすいだろ?俺はこのビルの屋上でお前らを見ておくから、ピンチになつたら援護するよ」

「つて言つたはずなんだけど……あいつらどこ行つた?」

そう俺は先ほどまで姿を隠していたビルの屋上でため息をつきながら景色を眺める。

つい十分ほど前、イルとミラの二人をエネミー狩りに向かわせたのだが、ものの数分

で見失ってしまった。

この辺りは今俺が屋上にいるビルと同じくらいの高さのビルが多く立ち並ぶ様な場所ではあるが、見失うなんて事はないはずだ。

もし、二人がエネミーを倒すのに苦戦していたとしても、イルの攻撃はかなり目立つから直ぐにわかるはずだ。

まあ、その目立った攻撃が無いから二人を見つけられないわけだが。

「はあ、しょうがない。たいぎいがビルから降りて探—」

『待てええ!!』

「—す事もなさそうだな……いったい何してたんだあいつら」

二人を探し始めようとした時、いつ聞いてもうるさい妹の声にもうひとつのカン高い声が混ざりあい大きく一帯に響き渡る。

声の発生源と思われるビルの陰に視線を向けると、先程の小さなエネミーがかなりの勢いで走ってくる。

そしてその後を追うようにイルとミラが、これまたかなりの勢いで走っていく。

今の様子を見ると、どうやら二人は必死に逃げるエネミーを十分間も追いかけていた様だ。

そんな様子を見て俺は呆れよりも先に、二人が無事だった事に少し微笑みながら安堵

する。

「まあ、初めてのエネミー狩りはこんなもんか？これ以上待つてたらかなり時間がかかりそうだし、そろそろ援護でも……はあ、今度は何だ？」

考えを実行に移そうとしていた俺は、背後からの視線に気付き今まで腕を乗せていた手すりから手を離し、振り返る。

今まで見ていた方向の正反対、つまりビルの裏側には今まで無かつたはずの茶色の壁が現れていた。

いや、良く見ればその茶色の壁は動物の体毛に覆われており、それがいったい何なのか理解するのに数秒要した。

その壁の正体は先程まで近くに留まっていたエネミーの群集の長と思われる個体だった。

どうやら先程から二人が追っている個体が居ないことに気付き、心配で引き返してきた様だ。

そんな時にさっきのエネミー狩りの現場を見て怒り心頭らしく赤い目はギラギラと光り、体は小刻みに震えている。

そんな長エネミー（今命名）に、言葉が通じないと分かっているながらも俺は声をかける。

「いやー悪いね、これもうちの弟子二人の成長のためなんだね」

『グルルルル…』

「そんな怖い顔はよしてくれって。手を出してきたら、お前も倒さなきゃなくなるしや」

『グルルルル、グオオオオ!!』

「おわ、あぶねえ!」

長エネミーが急に咆哮を挙げると、その頭に付いている大きな二対の角を勢い良く俺が居た手すりの辺りに降り下ろす。

俺は素早く反応し体を回転させながらかわすが、角が降り下ろされた衝撃で屋上の半分程が崩れ落ちていく。

そんな状況でも俺は半分笑いながら再び長エネミーを見つめる。

「おいおいマジでやんのかよ、俺もソコでエネミー狩るの久しぶりなんだけど……まあ、しやあないか。『Set up』」

俺がそう呟くと、両手の辺りに赤い光の粒子が漂い始める

そして、少しの間において光の粒子が俺の両手に集まり、アバターよりも鮮やかな赤を纏った双銃が現れる。

形状的にはリボルバーではあるが、少し長めのバレルが特徴的な銃だ。

まあ、こんな形状にしたのは俺ただけどさ。

俺は相棒である双銃を握りしめながら、長エネミーを睨み付けながら声をあげる。

「さあ、狩りの始まりだ！」

Anxiety 心配

「ふい〜……」

そんな声を無意識のうちに漏らしながら俺、カザミシユンヤ風見俊弥はBBの仮想世界から現実世界へと帰還した。

先ほどまでの殺伐とした雰囲気ではなく、いつも見慣れた青を基調とした自分の部屋の心地よさを感じつつ目の前の様子を確認する。

その目の前には俺と同じく意識が戻った様子の長い黒髪の少女と、いつも見慣れた茶色のセミロングの二人の女子がいた。

俺の視線に気付いたのか、俺の妹である土ツカサがニヤニヤしながらこつちを見てくる。

「なあに兄ちゃん、あたしらをじろじろ見えてきて。もしかしてあたしの魅力に圧倒されて惚れちゃった？」

「あほ、残念系美少女に惚れるほど俺は落ちぶれてない」

「兄ちゃんひどい！ 那澄ちゃんのこといじめないでよ！」

「……え、うち？」

「那澄が該当するのは美少女だけだ。残念系には該当しねえよ」

「何故だ!? あたしと那澄ちゃんの間には、そんな差はないはず!」

「そういう所が残念だつて言ってるんだよ、自覚しろ」

そう弁明すると、何故かもう一人の帰還者である斑鳩那澄イカルガナスミは頬を朱に染めながら両頬に手を当てうつとりとした表情を作り出していった。

「そんな……まさかシユンさんが告白してくれるなんて……」

「ああ、また那澄の乙女スイッチが入っちゃった。俺はただ”美少女”つて言っただけなのに……どうしよ」

「おっ、い、那澄ちゃん? 戻ってこっ、い」

「えへへ」

「あ、これは重傷だね」

そんな感じで明るく戯れ合っていたが、少し雰囲気を見目モードにしつつ会議を始めようとする。

が、万が一うちの母親（別の部屋で作業中）に聞かれてしまう可能性が否めないため、ニューロリンカーの機能のひとつである《思考発声》によって会話を始める。

ニューロリンカー——そう呼ばれる通信端末が登場したのが15年前の2030年、俺の生まれる前の年のことだ。

これは人間の首に装着する通信端末であり、現在では旧時代の《ケイタイデンワ》なる通信端末のように一人一台に普及している。

この端末により、脳細胞と無線通信を行うことで仮想空間を体験したり、医療の現場でも健康のチェックに利用されるなど多方面の活躍がされている。

今俺の首に装着されている暗い赤のニューロリンカーも俺が生まれつき体が弱かったために、出生直後からの付き合いだ。

そのおかげで身体のチェックを逐一行えたり、体を動かす際のアシストによつて日常生活に支障がないくらいに動きが出るようになっていた。

実際にはさつきまでの様にそれ以外の用途でも使用しているが、それは今現在では俺と土と那澄三人だけの秘密だ。

『(で?どうだった?初めて二人でエネミーを狩ってみた感想は)』

『(キツかったに決まってるでしょ……兄ちゃんと違って、あたしと那澄ちゃんはまだレベル5と4なんだし)』

『(それにシユンさんは遠距離型で攻撃力があるのに、うちと士ちゃんは間接と防御だから攻撃力は低い、ないしはゼロに等しいし……)』

どうやら自分たちのアバターの攻撃力が低いことを気にしていたらしい。別にそれが個性なんだから関係ないと思うが。

俺は慰めるつもりで二人に手を伸ばし、両手で頭を撫でる。

『(でも俺はよくやったと思うよ？初めてにしてはなかなか上出来だった)』

『(え、えへへ、そ、そうかな?)』

『(ああ、頭を撫でられるなんて……これが愛の営みなのですね)』

『(いや、違うから)』

那澄が無然とした表情をこちらに見せてくるが、経験上スルーしておくに限る。

他愛もない話しつつ、俺は思考発声にならないように一人で頭の中を巡らせる。

先ほどの狩りでは、俺が長エネミーを倒した後に再び様子を見に行ったらかなり苦戦して二人共息がかなりあがっていた。

結局俺がアシストでエネミーの足を止めて二人がトドメをさすという感じで収まった。

まあ、通常ソロでエネミーを狩る際は《ハイランカー》と呼ばれる部類(この部類には俺も含まれる)になりたての奴でも苦戦する位のレベルだし。

那澄はおろか、士でさえまだのハイランカーの部類には入れるのはまだ先の事になるだろう。

だから俺が今までは率先して前に出てエネミーに攻撃をして、二人には基本的に後方からの支援をしてもらっていた。

(だからこそ、俺が手助けできない状態になったら二人はどうなってしまう?)

さっき言ったように、この二人のアバターはお世辞にも攻撃に向いてるとは言えない。

もし今後二人でエネミーを狩るような事態になってしまった場合、そして可能性としては低いが強力なアバターに襲われたら……。

一人でぐるぐると頭を回転させていたとき、ふと那澄の薄い黄色のニューロリンカーに目がいく。

そしてある方法を思いつき、その事を話すため二人に声をかける。

「二人とも、ちょっと提案があるんだが」

『はい?』

急に思考発声では無く、自分の口から言葉を発したのが不思議だったのか、心底不思議そうな顔をする那澄。

士も驚いたのか、丸い目を大きく見開きこちらを注目してくる。

「那澄、『子』を作ってみるか?」

その言葉を口にした途端、頬に衝撃を受けながら俺の意識は途絶えた。

F i n d i n g 発掘

昼休憩の時間

生徒が足早に教室を出ていく流れに乗り俺は一度図書室に寄り、上級生の教室を避けながら校舎の屋上に向かう。

俺の通う私立城ヶ崎大附属学校はこの近辺でも有数の名門校で、全国各地に姉妹校を持つ超進学校だ。

そんな格式のある学校ではあるが、校風はかなり自由で生徒を第一に考えている。

今向かっている屋上もその一つで、生徒のリフレッシュの為にテラスの様な構造になつており昼休憩等の時間には沢山の生徒で賑わう。

屋上に到着しテラスを眺め、土と那澄の姿を確認し二人の座っているテーブル近く。

「兄ちゃん遅い！昼休みになつたらすぐに来るように行つたのは誰だっけ!？」

「ごめん、ちよつと本の返却行つてから三年の教室通らないようにしてたから」

「あく、もしかしてそれって中等部の生徒会長さんに見つからんため？」

「そう……昨日修学旅行から帰つてきて絶対に絡んでくるからなく。もし俺が三年に

なってもあの人高等部に行くから結局は弄られるけど」

「そんな理由になるかあああああ！美少女二人を待たせておいて、それだけで済むと思うなよっ！」

「まあまあ、士ちゃん落ち着きなつて。もし会長さんに見つかったら、またシユンさん女装させられてたんだよ?」

「そうだそうだ、俺だつてもうあんなカッコしたくないんだよ。士是那澄位のおおらかな心を持ちなさい」

「ぐぬぬ……！那澄ちゃんめえ……そういうところでポイント稼いでるのかっ！」

士が歯をギリギリしながらこちらを見てくるが、この際無視！いちいち反応してたらこっちが疲れるし。

そういうえば話の中にもちよつとあつたが俺はこの学校の中等部の二年生、対する士と那澄はこう見えてまだ初等部の六年生だ。

そして何故初等部である士と那澄が中等部の校舎屋上にいるのか。

それはこの学校の校舎が初等部から高等部まで、ちよつと漢字の『(日)』の様な構造によつて繋がっているからだ。

理由としては、年齢という垣根のない交流を目的としている……らしい。

まあ、私立だからこその造りなんだろうけど、まるで遊園地の建物みたいだから最初

何がなんだか分からなかった。

ある程度話込むと、那澄がポケットから細長く、黒光りするものを取り出す。

その正体はXSBケーブルといい、ニューロリンカーの直結通信を行う為に使用されるものだ。

直結通信を行う場合、ニューロリンカーに設定されたセキュリティの九割が回避される。

そんなためか、学校等の公共の場において異性間で直結を行うというのは、二人が付き合っている事を公言しているような行為である。

最初の頃は那澄も直結に躊躇ったりしてたのに、今じゃ自分から差し出すようになったもんな。

那澄が差し出したケーブルを士のニューロリンカーに接続し、さらに士と俺のニューロリンカーを相互に繋ぎあわせる。

そこから思考発声により会議を始める。

『さて、候補は見つかったか?』

『(……それより兄ちゃん、先に一つ聞いていい?)』

話を切り出してすぐ、士が神妙な面持ちで俺に質問を投げかける。

いきなり出鼻をくじかれて内心へこむ俺だが、一応議長を務めている身なのできにせ

ず進行していく。

『(なんだよ改まって、どうした?)』

『(何で急に“子”の話が出てきたのさアレ以来ずっとその事は話さなかったのに)』

『(え? いや、特に理由は……)』

『(嘘、どうせ昨日のエネミー狩りを見て、私達に加えてもう一人居たら……とか思ってるんでしょ)』

『(う……)』

流石は士、親の次に付き合いが長いだけの事はある。

『(うちらが頼りないから? 頼りないから、新しく人を増やすんです?)』

『(いや、決してそんなわけじゃないぞ)』

『(まさか、また自分勝手に決めて居なくなろうとしてるんじゃないの? それだったらあたしは絶対に反対だよ)』

『(……)』

その言葉に対し俺は言葉を失い、思わず顔を俯ける。

去年の5月俺と士は母親の仕事の都合で東京からこの広島にやってきた。

その頃の俺は、ある出来事をきっかけに精神的に追い詰められ、全てを士に引き継がせ逃げ出そうとした。

だが士はそれを拒否し、俺にこのままでいろと諭した。

だが俺はそれでも納得出来ず、結果として那澄まで巻き込む結果となっていました。それから一年と少し経った今では全くその気持ちは無く、寧ろ今の心持ちは全く逆。

『（そんなことは無い。あれから少しは気持ちを落ち着ける事も出来たし）』

『（……そつか。なら良いや〜）』

先ほどまでの真面目口調は何処へやら、いつものだらけた士に戻る。

それを見た那澄が笑みを溢しながら、俺に向かってデータを送信してくる。

ちなみに候補としての条件は最低条件は『（二人の友人であること）』だけだ。

理由は単純、二人の友達以外だったら俺も二人も中々信頼できないからな。

『（この子が“子”の候補なんじゃけど……）』

『（どれどれ……え〜）』

その候補のデータを見た途端、俺は思わず声をあげそうになるのを堪えつつ改めて聞き直す。

『（候補って、マジでコイツ？）』

『（マジです♪）』

滅茶苦茶良い笑顔で返された……こりゃ駄目かもな。

そう考えつつ椅子にのけぞり見上げた空は、梅雨時に似合わない晴天だった。

Remove 再動

BB—正式名称：BrainBurst2039

そう呼ばれるアプリケーションが配布されたのは、今から5年前の事

当時小学校に上がりたての一年生100人に正体不明の製作者がもたらした一つのプログラム、それがブレインバーストだった

製作者不明、目的も不明、ただ一つ言えるのはこのプログラムが人知を超えた物だと言う事

そんなプログラムであるBBは、もちろん販売しているものではない

このプログラムを自分のニューロリンカーにインストールするには、プログラムがインストールされたニューロリンカーとの直結通信でのコピーインストールしかすることが出来ない

前にも言ったが、直結は異性間で行えば付き合っている事を公言してるもんだし、同性間でも思春期の子供（特に女子）はかなりの抵抗がある

だから——

「同性とはいえ直結とか嫌だつて！」

「大丈夫だよ颯ちゃん。……痛いようにはしないから」

「直結で痛いって何?!絶対やだからね!」

「またシユンさんの部屋に来ちゃった……きやつ♪」

『青春スイツチならぬ乙女スイツチオン!』

直結を嫌がって暴れるのは良いけどさ、ここの俺の部屋だからさ……

「お前ら!騒ぐなら俺の部屋以外でやれ!」

「うう……痛い」

「強制的に連れてこられただけなのになんでうちまで……」

「く♪」

「ゼエ……ゼエ……大体、お前らが、騒ぐのが、悪いんだつての……」

というわけで現在、三者三様の反応をみせる小学6年の女子を正座させての説教タイム中

眼前にニューロリンカーから脈拍が異常だという警告表示が出ているが、これは俺の体力がかなり低いのが原因なのでスルーする

「ハア……、大体二人とも颯にはちゃんと説明したのかよ」

「いや、ほとんどなんにも」

「兄ちゃんが全部説明してくれるって言うておいたし」

「そうなんよ！シユンが全部説明するからって二人に有無を言わさず連行されてきたんだよ!？」

「うわあ、俺に全部丸投げかあい」

ちゃんと説明しておけって言ったのに、結局俺が説明するのかよ。めんどくせえ

あ、そういうえば昨日のメンバーから増えた一人について説明しないとな

俺を“シユン”と呼んでいたのは鈴代（スズシロ）颯（ハヤテ）と言つて、土と那澄の同級生

短く切り揃えられた髪と日焼けした肌が特徴的だが、颯はソフトボールで全国に行く程の運動神経の持ち主だ

こいつが二人の連れてきた候補らしいんだが……

「はやてには無理なんじゃないか？」

「なんで連れてこられたかも分からないのに、なんでうち自身を否定されとるの!？」

「兄ちゃんひどくい」

「あくほんとにめんどくせえなあ」

もう一々言われるのも嫌なので俺は椅子から降り、正座しているはやての両肩を掴みかかる

「ちよ、何するん!？」

「はやて、よく聞け」

俺が肩を掴むとすぐにはやては俺の手を振り払おうとする

が、俺が真剣な口調ではやての目を見つめると、大人しく抵抗を止める

それを確認した俺は普段は出さないような表情で話を続ける

「今からお前のニューロリンカーに、あるプログラムを送ろうと思う。インストールするかどうかはお前次第だが、これだけは言える。このプログラムをインストールする事が出来れば、おまえの人生は大きく変わる事になる……さあ、どうする?」

「なんか、大層な話じゃけどそもそもなんでうちなん?」

「ん? ああ、インストールするためにはいくつか条件があるんだがな……でもやっぱ、はやてなんかじゃ無理かもな」

プチッ!

何かが切れるような音

「へえ、うちには出来んみたいにゆうじゃん」

「ん? いやあ、土と那澄には出来たけど、お前じゃな〜」

プチプチッ!

再び何かが切れるような音がするが、どうやら音の発生源は颯らしい

颯は肩に乗っていた俺の両手を振り払うと、腰に両手をあてながら高らかに言い放つ「ゆうてくれるじゃん！ええよ、そのプログラム、インストールしてみせようじゃん！」後ろに『バーン！』と、効果音や背景が出そうな位堂々と胸を張る

……単純な奴だな、相変わらず

そう頭の中で考えるが、口に出せばいちいち怒鳴られるので黙っておきつつ、俺は自分の机の引き出しからある物を取り出し颯に手渡す

その黒く長細いそれは、ニューロリンカーを直結通信させるためのXSBケーブルだった

「ほい、それを使って那澄と直結しな」

「……もしかして、さっきからうちと直結させようとしてたのってそのプログラムをインストールさせるためじゃったん？」

「正解だよ、颯ちゃん！さあ、レッツ直結！」

頼むから士はちよつと黙っててくれ……疲れるから、ほんとに

そんなやりとりがあつて数分後、乙女モードに入つて話を聞いていなかった那澄を現実世界に引き戻し、直結でのインストール準備に取りかかる

それを眺めていた俺に、士が思考発声で話しかけてくる

『(兄ちゃんさつきは颯ちゃんをうまく誘導したね〜)』

『(あ? 何の事だかさつきはぱりなんだが)』

『(とぼけちやつて。颯ちゃんは負けず嫌いだから、あんな感じで”無理だ”って強く言えれば必ず自分からやるって言い出すからね〜)』

……ほんとに土はどうでもいい時に鋭く物事を見てくるよな

事実、俺はさつきの颯との会話では少し怒らせる様な会話をしていたが、その方が話が進みやすいと判断したからだ

でもその事を土本人に言えば必ず調子にのってまたテンションを上げてくるので、俺は無言を貫く

その無言をどう解釈したのか分からないが、土は視線を目の前に正座しながら向かい合っている二人にに変わった

ちようど那澄が颯にプログラムを送ろうとしていたところのようで、伸ばした人差し指で何かを颯に滑らせるように空間をなぞる

するとケーブルを経由して無事届いたらしく、颯が一瞬肩をすくませ、たった今届いたプログラムを改めて確認する

「えつと……『BrainBurst2039』?」

「そう、それがお前の人生を変えるチケットだ。今ならまだ引き返せるぞ?」

俺は最終確認のつもりでこう言うが、それに対して颯はムツツとした表情でこちらを睨んでくる

「何だよその目は」

「べつにつにく、うちは一度言った事は曲げる気はないし」

そう言いながら颯はイエスポタンがあるとと思われる位置をぎこちなく押す

しかしボタンを押してすぐに、肩を竦ませ慌て始める

実はBBをインストールするための適正をチェックするために、インストールを行う際、視界全体に仮想的な炎が上がる

適正が無ければ炎を見ること自体不可能なので、颯には一応適正があるということだろう。二人が連れてきた時点で最低条件は満たしてはいるだろうけど

そこまで一人で考えていると再び士が思考発声で話しかけてくる

『(とりあえず第一関門は突破したみたいだね。第一条件はクリアしていたとはいえ、ヒヤヒヤしたよ)』

『(連れて来たのに何無責任なこと言ってるんだよ)』

『(えく、いいでしょ別に)。それよりも兄ちゃんは成功と失敗、どっちだと思う?』

『(露骨に話を逸らすな。……まあ、可能性としては五分五分だろうな。もう一つの条件のほうが微妙だし)』

さつきから条件がどうと言っているが、実はB Bインストールには二つの条件がある
まず第一条件、『ニューロリンカーを出生直後から装着していること』。これがもつと
も重要な条件

そして第二条件、『大脳の応答速度』なのだが、これが一番厄介だ

これは色々と話していると長くなるので簡単に説明すると、ニューロリンカーと大脳
との反応がどれだけ速いか、反射神経がどれだけ優れているかだ

第一条件は二人に確認を取らせているから大丈夫だろうが、第二条件には厳密な基準
が存在しないので確実なことは言えない

ゲームが苦手な奴でもインストールできたという話は聞くが、颯は機械音痴の上は何
故か旧時代のテレビゲームをするとすぐに酔ってしまふ

そんなハンデがあるから候補リストに颯の名前を見たときに迷ったんだが、颯は二人
とかなり仲が良いし俺との面識もあるから賛成した

だがこれでもし失敗したら……いや、よしておこう。失敗したとしたら俺が二人とも
独り立ちさせるくらいに鍛えればいい話だから

数十秒の後インストール作業が終了したようで、颯がゆっくりと肩の力を抜いていく
「えーと、なんて読むんこれ？う、うえるかむとうー……」

「ウエルカムトウ・ジ・アクセラレーツテッド・ワールド」、な。ま、それが見えるの

「なら成功したってことだな、おめでとう」

『いえーい!!ヤッター!!』

素っ気無く祝福の言葉をかける俺とは対照的に、士と那澄はハイタッチしながら喜ぶ
 なんかまた俺の心配事が増えそうな予感。いや、予感じゃなくて確信か

「おら、颯に説明するから騒いでないで二人とも準備しろ」

『はい』

俺が話しかけると珍しく素直に言うことを聞き、那澄のニューロリンカーを士と繋
 げ、士のニューロリンカーに接続されたXSBケーブルを俺に渡してくる

「やっぱり”子”が出来るると嬉しいのか?俺の場合は……もうずいぶんと前の事だか
 ら忘れてしまったな

内心で思考を巡らせながらも俺は士から手渡されたケーブルを自分のニューロリン
 カーに接続しながら、机から今の世の中で滅多にお目にかかれない『500円玉』取り
 出す

そしてその硬貨を人差し指で抑えた親指の上に乗せ、颯だけでなく士と那澄に思考発
 声で話しかける

『(二人は分かっているだろうからあんまり言わないけど、颯はカウントの後に俺たちが
 叫んだ言葉と同じ言葉を遅れずに言うんだ)』

『(ハイー!)』

『(うん……でもこれから何をするん? 全く説明がないのに)』

『(時間はたつぷりあるし、説明はこれからするよ。絶対に遅れるなよ? 3・2・1!)』
カウントが1になり0と言う代わりに、俺の人差し指で抑えていた親指をはじくように離す

その反動で親指に乗っていた硬貨が空中に舞い、それが最高点に達したところで俺たちはあの世界へと行く魔法の言葉を叫ぶ

『バーストリンクー!』

Practice 実践

『バーストリンク!』

俺たち4人がほぼ同時にその言葉を叫び耳元に衝撃音が響くと共に、自分の視界に移る物が蒼く染まり、さきほど飛ばした500円玉や俺たちの身体の動きが緩やかになる。

そして動きが緩やかになった俺の身体から、ローカルネット用アバターとして使用しているデフォルメされた二足歩行の狼が出て来る。

出てくるとは言っても、現在意識はアバターにあるので違和感のある言い方ではあるが、仕方がないということにしておこう。

他の三人も同様に各々のアバター、妖精、忍者、フランケンシュタインが現れる……いつ見ても威圧感が半端じゃないな、那澄のフランケン

BBをインスタールする前からあのアバターだし、前に何故フランケンなのか聞いたら「可愛いじゃないですか」って真顔で言われたし。

やっぱり那澄の感性はいまいち分かん

「何これ!? どうしてうちが目の前にいるん!? てかなんで『完全フルダイブ』もしていない

のにローカルネットのアバターに!」

この情景を初めて見る颯が何やら騒ぎ立てている。こういう反応はなんだか懐かしい。

ちなみに颯が口にした『完全フルダイブ』というのは、通常視聴覚に作用しているニューロリンカーの機能を体の全神経に作用させ、アバターを介しての仮想空間を体感することが出来るようにする事だ。

しかし、今現在起こっている現象は『完全フルダイブ』によるものではなく、先ほど颯がダウンロードに成功し俺たち三人のニューロリンカーにもある『ブレインバースト』プログラムによって引き起こされている。

「なんでうちアバターになつてんの!?!なんでこんな周りが青くなつてんの!?!結局さっきのプログラムつて何!?!」

「やかましい!これから説明するから一度に何個も聞くな!」

颯がここに初めて来た人として、普通の反応を見せるがちよつと五月蠅かったので音量を下げさせる。

さすがに自分が騒ぎすぎたことを自覚していたのか、少し静かになる颯

それを確認しながら俺は颯に少しずつ説明を始める。

「さて颯、今この世界について気づくことはあるか?」

「気づく事って……ただ周りが青くなってるだけじゃない?」

「いやもつと他にあるだろ、他に。例えば、この俺達の身体がゆっくりになってるか」俺が説明しながらアバターではなく、自分本来の身体を指差す。

「しかしまいち分からなかったのか、目の前の忍者は頭の上に『?』が出るくらい考え込んでいる。」

「だがそういう反応が来るのもある程度予測できていたので、先ほど飛ばし空中を舞っているコインを指差す。」

「先程飛ばしたコインはかなり緩やかに、だが確実に回転しながら重力に引かれながら落ちている。」

「ほんとじゃ、コインがものすごい遅く落ちとる」

「……感想はそれだけか?」

「うん、それだけ」

「……はあ、まあ良いか。とりあえず話を進めるな?今起きてる現象は、さつきインストールした『ブレインバースト』によるものなんだ」

「え?じゃあ、今起きてるこの現象もさつきのプログラムのせい?でもそこまで凄い事じゃあない気が」

「それは何でそう思うんだ?」

「だってさ、これってただリアルタイムで録画している映像をスローモーションで再生してるだけじゃろ？それなれ別に凄くもなんともし」

「それは違うよ、颯ちゃん！」

いままで蚊帳の外で会話に参加していなかった士（妖精）が急に大きな声を上げながら、無理矢理会話に入ってくる。

あ、これはなんだか面倒くさい事が起こる予感

「これはリアルタイムをスローで再生してるんじゃないかと、あたしたちの思考が加速しているんだよ！」

「思考が加速？何いってんの？」

「颯、まずニューロリンカーの仕組みは分かってるか？」

現実世界の俺たちの首に装着されている『ニューロリンカー』の仕組み――

簡単に言えば、俺達が視界に捉えた情景をニューロリンカーが判別し、その情報を量子回線で俺達の脳細胞に直接送ってくる。

つまりは、俺達が今現在見ている物や喋ること、考えることは全てニューロリンカーを経由して送られてくるというわけだ。

B Bはそれを利用し、ニューロリンカー内で脳内との量子通信を増幅させることにより思考を一加速《・・》させる。

「思考が加速されることによって生成されるこの青一色の状態はブルーワールドと言われる加速の第一段階だ。」

第一段階、と表現したのはこれよりも先の状態があるからこそその言い回しなのだが、颯はまだこれより先には進めないの、説明だけしておく。

「ふーん」

「さつきから反応薄いな、お前」

「え、結局のところあれじゃろ？ただ視界が青くなって、物事の色が遅くなるだけじゃろ？」

「……身体と同じで貧相な考えしかないのな」

「誰が貧相じゃ、誰が！うちはまだ成長期だ！」

「そうだそうだ！颯ちゃんはまだ成長しきってないだけだ！」

「土、それフォローになってないし。第一うちよりスタイル良いお前が言うか!？」

「ふふふ、やつぱり二人とも面白いね♪」

「那澄は何笑ってんだあああ！」

「あーうつせえ」

相変わらず三人が同時に喋ると、各々テンションがかなり違うから疲れる。

だが、説明を全て行わないと次のステップに進めないの、自分の身体に鞭をうちな

がら説明を続ける。

「ちよつと俺の机の下を見てみ。面白いもんが見れるから」

「……面白いもんって何？はつきり言いんさいや……」

そう言いながらも机の下に潜り、ちゃんと確認する颯

そんな素直な部分をいつも見せてほしいよ……まあ、言っても無駄だろうけど。

そう考えていると颯が確認し終えた様で、少し不思議そうな顔をしながら戻ってくる。

「何これ、机の下がウネウネして気持ち悪い事になつとるけど？」

「さつき言ったように、この世界は仮想的なものだと言ったよな？じゃあ、どうやって仮想的なこの世界を作つてると思う？」

「なんか小学生に聞くような話じゃない気が」「それはだな……」おい！うちに聞いてたんじゃないんか!？」

いや、元よりその方面の知識が無い小学生に聞くほど俺もバカじゃないし。

颯がまだ何か喚いているが、大分時間も押しているのでスルーしつつ、自分の部屋の一点を指差す。

「それって……もしかしてソーシャルカメラ？」

ソーシャルカメラ、正式名称はそこそこに長いので割愛するが、現在の日本では治安

維持を主目的としてかなりの数が設置されている。

このカメラ設置は私学でも拒否することは出来ず、そのデータは国家レベルの嚴重な警備に守られている……はずなのだが、『ブレインバースト』はそんなソーシャルカメラをハッキングしている。

かなり大層なことをしているが、それを利用してやっていることは結構しょぼいことなんだがな……。

「簡単に言えば、この世界はソーシャルカメラをハッキングして得た画像情報を元に再構成された仮初めの世界だ。だが、ソーシャルカメラの死角になっている部分は再現する事が出来ないから、そんな感じで曖昧に写るんだ。つまり、ソーシャルカメラの視界内に入ってさえいれば、全て再現されるって訳だ」

「ハッキングって大層な話をさらつと言うんか。にしても、視界内に入ってさえいればねえ……ん？」

俺のやる気のなさげな説明を聞いた上で、何かに気づいたのか急に顔を赤くしながら現実世界で正座している士の膝の前で仁王立ちになる。

「……颯、お前何してんだ？」

「視界に入ってるのが再現されるのなら、スカートの中も見えるんじゃない!? 見せてたまるか!」

「誰が見るかって」

そう言いながら颯のデコの辺りにデコピンをかまし、その衝撃で颯（忍者）が倒れこむ。

その後ろで士が「別にあたしは見られても良いけどな」と言っているがスルーで。てか、士。お前は恥じらいという物を覚えろ、精神年齢は無駄に進んでいるくせに。

最近で言えば風呂に入った後に下着姿で徘徊するのとかはほんとにやめてくれ。

……それは母さんにも言える事か。

「ほら、痛がってないで早く立て。今日の所はここまでだ」

「え？ 終わり？ さつき言っとた次のステップは？」

「だくかくらく、今日の時点じゃお前にやまだ無理なんだって。はあ、それじゃ、現実世界に戻るからこれから俺達が言うコマンドに続けよ？ 『バーストアウト』」

やる気のなさげなコマンドの発声と共に、先程まで青に被われていた世界に色が戻り俺達の意識が自身の身体に戻ってくる。

そしてつい先程説明のために弾いたコインを落ちきる前に右手で掴む。

「……ん？ あれ、戻ってこれた？」

「お帰り。早速で悪いが、時計を確認しろ」

「命令口調で言われると腹が立つんじゃないけど。……うわ、さつき5分位喋ってたはずな

のに全然時間が進んでない」

「これで分かったか？思考が加速するって言った意味を。続きは明日の昼休憩の時に話すから、屋上に来る様に。それじゃあ今日は解散」

言葉の最後に「今日寝るときはニューロリンカーを絶対に外さないように」と付け加え、この日は解散した。

翌日――

この広島に記念すべき4人目のバーストリンカーが誕生した事に、隠しきれない程喜んでいた俺はこの日も通常どおり屋上に向かっていた。

しかし、前日わざと上級生の校舎を避けていたのがバレたのか、待ち伏せしていた生徒会長に捕まってしまった。

しかも修学旅行帰りだったためか異様にテンションが高く、鬼気迫る表情をさせながら俺に女装を強要してきた。

なんとか一瞬の隙を見付逃げ出したが、あの人の怖さを再認識した……あの人には勝てないわ、うん

アラート画面が表示され息が絶え絶えの状態で屋上に上がると、既に士達三人がイスが四つあるテーブルに座っていた。

「う、うつす……」

「…会長に、捕まったでしよ、悲惨だね」

「悲惨て言うな、悲惨て。五七五で言われたら余計に腹が立つわ」

溜息混じりに士の言葉に対して応答をしながら頭を抱える。

抱えていた手を離すと（一瞬目を閉じていたために気づけなかったが）、三人は着々と

直結の準備を進めていた。颯だけは嫌がってたけど

そして士のニューロリンカーから伸びたXSBケーブルを自分に接続すると、他の三人とアイコンタクトでタイミングを合わせ小声で囁く。

『バーストリンク』

再び世界が青くなり、隣のテーブルでこつちを指差しながら笑っている同級生の女子や、屋上端にあるベンチでイチヤイチャしてるカップルの動きが緩くなる。

そして俺達のアバターが出てきて直ぐに颯が口を尖らせながら不満を漏らしてくる。

「で？結局寝る時もニューロリンカー付けとったけど、これでどうなるん？」

「まあ落ち着け。まずは左側に増えている『燃えているB』ってアイコンがあるだろ？それを確認してくれ」

「えっと、はい！あ、何個かのメニューが出てきた」

「それが『ブレインバースト』のメニュー画面だ。とりあえず一番下のマッチングリスト

を確認して、上から順に名前を読んでいってくれ」

「いちいち指示が多いなあ…えっと『ネイビー・ブリッツ』、『メイズ・ミラージュ』、『ティール・スパイク』、最後が『アントラクス・イエーガー』？何これ、最後の奴なんかめっちゃ読みづらいんじゃないか」

ちよつと”むっ”としたが、颯の言い分にも一理あり。

正直自分の名前である『イエーガー』なんか最初読めなかったし。せめて英語にしてくれ、ドイツ語は無理。

さて、今名前を読んだ順からして『ネイビー・ブリッツ』というのが颯のあの世界での名前なのだろう。

しかし、颯にはなんのことも理解できるはずが無いので、こちらも『ブレインバースト』のメニューを開き『対戦』の画面に移行する。

「えーつと、士、那澄、いまから颯に対戦を申し込むけど、めんどくさいから『バトルロイヤルモード』で良いか？」

『良い(です) よ』

「何？またうちだけ置いてけぼりか？今度は何する気や？」

「まあ、見てれば分かるから」

そう言いながら画面を操作し続け、対戦するか否かのメッセージ文の『YES』を押

す。

すると蒼い世界が少しずつ移り変わると共に俺の身体が光に包まれ、赤紫の装甲を持ったデュエルアバター『アントラクス・イエーガー』へと変貌する。

そしてデュエルアバターに変わりきるとほぼ同時に、世界も様変わりする。

視界の両端の上側には旧時代の格ゲーのような体力ゲージが表示され、体力ゲージに挟まれる形で『1800』という数字が現れる。

ちなみにこの『1800』という数字は、この加速世界で活動できる30分間（こちらでは現実世界の1000倍で時間が進むので現実世界換算で1.8秒）の制限を表している。

そして数字の表示が減ったところで、足元の浮遊感が無くなり地面に足をつく。

「さて、今回のフィールドは……うへえ、『煉獄ステージ』かよ。くじ運ないなあ」

ため息をつきながら思わず肩を落としながら俯く。

煉獄ステージは、ブレインバーストが生み出す対戦フィールドの一つで、特徴としては「硬い」、電気が限定的ではあるが通っている、そしてもう一つ――

「煉獄ステージかあ、相変わらず気持ち悪っ」

「何度来てもここだけは慣れませぬ」

――フィールド全体が触手の様な物で覆われている、言ってしまうえば内臓のような様相

で気持ちが悪い。

女子のバーストリンカーにとっては、不人気といえる部類のフィールドだ。

今回は学校内のローカルネットにつなげた状態で加速したので、今いる屋上を始めとした学校全体が内臓の様な見た目になっている

「……なんかもう、驚くのも飽きた」

そんな颯の呆れ声が俺の後ろから聞こえ、俺は身体をそちらの方向に向ける。

颯と思われるアバターは（名前を聞いた時点で分かつてはいたが）、濃い紺色を纏っていた。

半袖半ズボンと、ソフトボールのユニフォームを思わせる見た目に、右手には肘まである大きめなガントレットを持つ小柄なアバターだ。

鏡が無いため本人は確認することが出来ないが、自分の手のひらや俺たち三人の見た目が変わっていることにたいして少し疲れ気味な声をあげる。

「ローカルネットアバターの次は何これ？明らかに普通のアバターじゃないじゃろ。三人とも明らかに人間の見た目じゃないし」

「ああ、これは対戦格闘ゲーム『ブレインバースト』で使用される対戦用のデュエルアバターだ」

「あのプログラムって格ゲーだったんか?!ハッキングまでして、ほんまにしょうもない

…

「正論だけだな、これやってると現実がつまらなくなるぞ、まじで」

俺が話すことに對し表情を確認することはできないが、明らかに呆れの感情を向けてくる。

最初は信じらんないよな、土も那澄も、俺でさえもかなり戸惑った記憶があるわ……かなり昔になるけど

ずっと胡散臭そうな視線を送る颯……いや、イビー（今命名）の横に濃い緑色の『ティール・スパイク』となった土と、薄い黄色の『メイズ・ミラージュ』となった那澄が近寄り、べたべたとイビーを触りまくる。

「ちよ、二人ともやめえ！くすぐったいじやろ！」

「おおう、期待通りの青系のアバターだ！」

「しかも純色に近い紺色ですね。これは期待大です」

「それで？今日は颯ちゃんの初御披露目で終わり、って訳じゃないでしょ？」

「エネミー狩りをするにも、まだ颯ちゃんは上には行けんよね？」

「お前から無視かあ！」

「だからこそそのバトルロイヤルだよ。今日は颯が増えたことだし、『鬼狩り』久々にやるぞ」

『え？やったあああ！』

『鬼狩り』という単語にイルとミラが大袈裟に万歳をする。

『鬼ごっこ』と名前こそ似ているが、鬼狩りはほぼ正反対

簡単に言えば、『鬼』に指定された奴をそれ以外のメンバーが全力で狩ってくるという軽いいじめみみたいな訓練だ。

元々はイルを戦いに慣れさせるために始めたほとんどお遊びのものだったんだが、イルが異様に気に入った上ミラや東京にいた頃の知り合いのバーストリンカーなんかに言いふらしまくっていた。

正直な所ダサイとか言われたほうがまだ気が楽だったんだが、意外と好評で軽い黒歴史にしてしまいたいくらいだ。

「もち、兄ちゃんが鬼だよね？」

「なんだ？もしかして今日はイルが鬼やるのか？俺がやるつもりだったんだが」

「いや！鬼は兄ちゃんに任せるよ！……よしっ！」

本人としては見えないようにガッツポーズしてるんだろうが、全部見えてるぞ、おい。ちなみに何故二人が面倒くさい訓練に対してこんなにも喜んでるかという点、合法的に俺に攻撃することが出来るからだ。

まあ、攻撃が当たったとしてもこいつら二人の攻撃くらいなら問題はないが、懸念材

料があるとすれば、イビーの能力

見た目からして近接系のアバターであることは間違いないのだが、右手につけられている大きなガントレットがなんなのか、見当もつかない。

だが、三人の親兼師匠として無様なところは見せられない

視線を上に向けると、丁度制限時間の表示が『1500』になる所だった

「三人とも、5分やるからここから移動しろ。制限時間が『1200』になったら鬼狩りを開始する」

おー！と声を返すイルとミラに対し、いまいち理解ができていないイビー

イビーの能力がこの訓練で分かると思うが……まあ、久々の対戦だ。難しく考えず、楽しくいこう！

Inattention 油断

俺は屋上にあるベンチで仰向けになりながら、空を見上げていた。

空を見上げるといっても空を見ているわけではなく、視界の上側に映る制限時間のゲージ見ていただけだ。

別に空を見ても星が見えるわけでもなく、今まで数え切れないほど見てきた世界が映るだけ。

そう、数え切れないほどに……。

仰向けのまま、今度は左手を掲げ眺める

通常、デュエルアバターの外見の色というのは濃さの違いこそあるものの、基本的には一色で構成される。

東京にいた頃、同じレギオンに所属していた奴の中には二つの色を持っているやつがいたが、アレは例外中の例外なのだろう。

しかし、俺の左肘から先は血が固まった様などす黒い赤に変わってしまった。

元々左腕は全身と同じ濃い赤紫色をしていたのが、一年前のあの出来事以来何度切り裂いても、何度エネミーに喰われても、この闇に飲み込まれそうな黒がずっと根付いて

いる。

……いや、理由はとうに分かっているんだ。

一年前、アイツを助けられなかったという罪、そして、俺がだけ生き残ってしまったという事を忘れさせないための枷なんだ——

気がつけば、さきほど三人に指定した時間が刻一刻と迫っている。

ベンチから身体を起し、今度は変わり果てた母校の全体を眺める。

私学特有のバカ広い校舎、こんな広さじゃ普通は三人を見つけることは中々に難しい。

しかし、このブレインバーストはその辺を考慮してなのか、ガイドカーソルというのが視界中央に存在する。

これは相手が10m以上はなれ、お互いの姿が確認できない際に表示される。

現在ガイドカーソルは高等部の反対側、初等部の方向を示している。

残念ながら距離は分からないが、俺は遠隔射撃の赤系統のアバター、その上あの三人よりは経験値は上だ。

このフィールドや方向、ガイドカーソルが表示されていることやあの策士な妹の性格を考慮するとおそらく初等部の校内にいるだろう。

そして、この硬いフィールドの性質上狙撃が出来ないため、射撃するために近づいた頃を狙うという魂胆だろう。いつの間にか溜まっていて三人の必殺技ゲージがそれを物語っている。

「しかし、俺がそんなめんどくさいことをすると思うのか？我が弟子ながら浅はかなり
『Set Up』

いつもの起動コマンドを呟き、いつもの如く赤い光の粒子が漂い始める。

そして右手だけに粒子が集まり、1mを超える大きなライフルが生成される。

実は俺の初期装備であるコイツは状況に応じて様々な形態に変更が可能で、基本的にはこの前使ったようなバレルの長い二丁拳銃で使っている、使いやすいから。

今回生成したこいつは威力こそこの強化外装中最強のステータスを持っているが、『チャージが長い』、『打った反動で若干ダメージが来る』、『重い』という三重苦を持っているために護衛役がいる領土戦や、安全に狙撃できる箇所の存在する無制限中立フィールドでしか基本的には使用しない。その事はイルも知っている。

しかし、今回は久々の対戦、そしてイビーを鍛えるための特訓だ。俺も力を出し切り、存分に楽しませてもらおう。

右手のライフルを左手で支えながら構え、狙いを定める。イメージとしては、中等部の校舎を突き抜けて、初等部の一階にブチ当てるように……。

一瞬だけ息を止め照準がぶれないよう静かに、だが確実に、俺は引き金を引いた。

数分前――

「はあ……もうわけわからん」

うちの口から漏れた言葉は、昨日からいつたい何度出て来たのか。

数えただけでもおそらく二桁はいつているだろう……途中から数えてないから本当の数は分からないけれど。

でももつと分からないのは、今目の前にいる二人の事だ。

いつも五月蠅いくらいに元気な士、お淑やかなお嬢様みたいな那澄。二人ともうちの大好きで大切な親友だ。

でも、今目の前に濃い緑と薄い黄色の二人はこの気持ちの悪い学校だった建物を、何のためらいもなく進んでいく。

目の前にいる二人は、本当にうちの親友なのかさえ怪しく感じるほど、うちの頭の中は混乱している。

さつき受けた説明もそうだ。『思考の加速』、『ソーシャルカメラのハッキング』にそれを利用した『フルダイブの対戦格闘ゲーム』

三人で行動し始めてからは『カラーチャート』やら『体力ゲージと必殺技ゲージ』や

ら頭が痛くなりそうなことばかり。

何を言っているのかさっぱりだわ……。

「颯ちゃん、どうしたの？ さっきから黙ってるけど」

「気分でも悪い？ このフィールドは空気が悪いからなあ」

「え……実はさ、昨日からいろんなことが起こり過ぎて何がなんだかわからなくなってますと喋っていたことが気になったのか、二人が足を止めてうちに話しかけてくる。」

二人に思ったことを正直に話すと、お互いに顔を見合わせながら笑い始める。

「な、なにさ？ そんなに笑う必要ないじゃん」

「ごめんね？ そういえばうちらにもそんな時期があったなあ、って思ってた」

「あたしもあったなー。もう何百年も前だけど、あの頃はほんとにきつかったよ」

何百年？ 何の話じゃろ？ やっぱりわけわからんわ。

でも、そんな下らない話でも確信できたことがある。

やっぱりこの二人は、どんなに見た目が人間らしくなくても、うちの親友には変わらない。

でも、そんな和やかなムードに邪魔が入る。それに一番最初に気づいたのは、士だった。

「で？結局何すればええの？」

「そうだねえ、一番の問題は兄ちゃんがどう動くのかだけどーツ！二人とも伏せて！」

急に言葉を切り、普段と真逆の真面目な声でこちらに声をかけるので、素直にうちと那澄は屈みこむ。

それと同時に数秒遅れてかのタイミングで、けたたましい音と共に目の前にある中部の校舎に穴が開き、濃い紫色に光るビームがこの初等部の校舎に直撃する。

直撃した校舎の一部はビームの威力に耐え切れず砕け散り、その破片がこちらに飛んで来て――

「い、痛い痛い！て、ちょっと待って！？なんでアバターなのに痛みが!？」

「あく、そういうえばカラーチャートとかの説明はしたのに、そこらへんはしてなかったな
く」

「とりあえず後でもいいじゃろ？とにかく今はここを乗り切ることを――」

「なに勝手に話し続けて、うわあ!!」

余裕そうに話す二人に声をかけると、再びビームがこちらに飛んでくる。

今度は先ほどよりも（うちから見て）少し右側に逸れるが、やはり衝撃で校舎の破片が飛んでくる。

破片が身体に当たるとのを絶えながら視界を上に向けると、先ほど説明された『体力

ゲージ』とやらがほんの少しだけ減っている。

しかしうちだけでなく二人、そして（何故か）シユンの体力ゲージも少しだけ減っている。

でもこれだけですんで良かったと思う。もし、さっきのが痛覚ありの状態で直撃していたら……考えたくもない。

「うわあ、いきなりあんなのぶつ放すかな普通。手加減無しと大人気ないなあ」

「……あいかわらず冷静に物事を見るなあイルは。うちはビツクリして若干腰が引けるよ、あんなの見たことないし」

なのにこの二人は先程のテンションと同じ感じで会話を続けとる……。

特に那澄でさえちよつとビツクリしているのに、一人だけ冷静に考察している士に少し恐怖を感じるわ。

「さてと、これ完全に兄ちゃんはやる気だね。だったらあたしらも本気で生かせて貰おうか! 『Come On!』」

士がそう言いながら右手を掲げると、何も無い場所からトゲのついた盾の様なものが現れ、士の右手に納まる。

盾、というよりはメリケンっぽい……どちらにしても女子が持つようなもんじゃないけど。

「てか、士だけそんな物騒なもん持つててずるくない?」

「颯ちゃん? その言葉は右手を見てから言つて欲しいんだけど」

「右手? ……あ、そういえばこんなんあつたね」

「あたしみたいにボイスコマンドで呼び出したり、呼び出さずにずっと装備されていたりするんだけど、颯ちゃんは後者みたいだね」

右手を改めて見ると、今まですっかり存在を忘れていた籠手のようなものがくつついている。

これ、どうやって使えばいいのか分からない、普通に殴ればいいのか?

「説明してる暇ないけどちやちやつと説明しとくよ。自分の名前とかが書いてあるとこ選択すると必殺技とかでてくるから、確認しといて」

「……ごめん、何にも書いてないんだけど」

『……』

「え、ちよ、なにそのかわいそうな人を見る目は!? やめて! うち何もしてないのにやめて!」

「まあ、ある程度予想できてたけど、兄ちゃんと同じ感じなんだね。その分その強化外装に期待するしかないね」

「うーん、それでどうするのイル? さっきの牽制から向こうはこっちの場所を見つけて

動き出してるみたいだけど」

「……一回牽制入れてきてるってことはこっちの狙いが待ち伏せってことは気づいてるってことだよ」

「多分ね。だからこそ即死レベルの攻撃でこっちを燻り出そうとしてるんだろうし」

「だよ、ああいうのが兄ちゃんのやり口だろうし。でも、そうくるんならこっちはこっちでそれを利用させてもらおうよ」

そう言いながら士が作戦の内容をうちと那澄に説明する。うちに来るかわからないけど。

ところで『クククツ』と感じて士が笑ってるけど、なんかゲスイよ？あんなそんなキャラだっけ？……もしかして、そっちが素？

「さあて、今のでどうなった？少しくらいは当たっててくれよ」

ビームライフルを二発ほど校舎に撃ち込み、体力ゲージとガイドカーソルを同時に確認する。

ライフルのデメリットのせいで俺の体力ゲージが5パーくらい減っているが、向こう三人組の体力もほんの少しだけ減っていようだ。

が、三人とも動く気が無いのかガイドカーソルがまったく動かない。

「あれでも動かないのかよ……何考えてやがる？是が非でも待ち伏せする気か？」

そう言いながらも俺はビームライフルをアサルトライフルに変更しながら、初等部の階段を駆け足で降り始める。

だが数階降りたところで、機械が擦れ合うような異様に耳障りな音が聞こえている。

その音のせいで思わず両耳を押さえ、その場に立ち竦む。

「ああ……なんだよこの音はあ！絶対ミラだなこれ……ほんとにあいつのアビリティって用途が分からん」

ミラの『音響反響』アビリティは、音を反響、増幅させる事が出来るものだ。

……ただそれだけのアビリティだ。あいつがバーストリンカーになって現実時間で一年近く、未だにあのアビリティの意味が理解できない。

一応あいつもレベルアップボーナスを全部アビリティの強化に宛てているが、未だにそれ以上の能力を発揮していない。

まあ、今はそんなのは重要じゃない。この音の発生源がこの階ならば、三人がいるのはこの階だろう。

ガイドカーソルは今いる階層の反対側を——！

一瞬視界に捉えたイルの必殺技ゲージが少し減少するとともに、ガイドカーソルの方

向から棘の様な物が飛んでくる。

反応が少し遅れたせいで棘の一つが左肩に少し当たって体力ゲージが1割ほど削られるが、柱の陰に何とか隠れる。

陰に隠れながら校舎の反対側を確認すると、イルが東京に居た時から愛用しているメイド服をはためかせながら自分の強化外装をこちらに向けていた。

俺が確認しているのに気づいたのか、若干こちらをあざ笑うかのように見ると反対側の階段に駆け足で向かう。

「あのやろ、挑発するだけ挑発して逃げやがったな。……そういえばあいつ一人だけだったな、あと二人は何処行った？」

……まあいいか、とりあえずアイツから潰すか。

そう心の中で呟き銃を再び持ち直しながら校舎だった廊下を走り抜けようとする。

「くうらあええええええええええ!!!」

が、ちよつと走り始めてからすぐに横の教室からけたたましい音と妙に怒気の孕んだ声が響き渡る。

俺がそう判断する一瞬で煉獄ステージの硬い壁が突き破られ、小柄な身体のイビーがかなりの勢いでこつちに突っ込んで来る。

その勢いのまま俺に対して右手を振りかぶってくるが、何とか俺も右手で何とか受け

止めるがかなりの勢いがあつた為か一瞬左腕が痺れながら、俺の身体が向かい側の壁に叩きつけられる。

しかしそれでも衝撃は防ぎきれなかったのか、壁を突き破り中等部の校舎に激突し体力ゲージが一気に4割弱まで下がる。

「ああ、さっきの金属音は俺の集中力を乱す目的じゃなくて音を反響させてソナーの要領で位置を把握するためだったんだな……」

背中への衝撃で呼吸が止まりピンチな筈なのに、そんなくだらないことを考えてしまうのは内心まだ勝てると思っているからだろう。

俺の強化外装はまだ壊れていないし、体力ゲージは半分以下だがその下に存在する必殺技ゲージは建物の破壊ボーナスやダメージボーナスによつてほぼ満タンになっている。

これなら俺のアビリティを存分に……？なんで俺に影がかかつて徐々に声のような物が聞こえる。

「さっつようならあああああああああ♪」

いつの間にか俺の上側に移動していたイルが、スパイクシールドを振りかぶり嬉々とした様子で落ちてくる。

アビリティを使えば間に合うかもしれないが、俺のアビリティは座標固定をしないと

いけないために時間がかかる。このスピードで落下されたら間に合わ——

スパイクシールドの棘が当たった顔面に言葉にしようが無いほどの痛みが起これると共に、俺の体力ゲージが一気に0へと向かっていく。

そして、俺の眼前に燃え盛る「YOU LOSE」という文字が大きく表示された。

R i p p l e 波紋

『(いてえ……あのスパイクシールドってこんなに痛かったか?)』

『(まあ、重力+あたしの体重+煉獄ステージの地面とのサンドでいつもの倍近くのダメージが通ったからねえ)』

『(仮想のダメージとはいえ、痛覚はあるからきついわ……ああ、顔がグチャグチャになつてるような痛みだ)』

『(兄ちゃん心配しないで!その可愛い童顔は潰れてないから!)』

『(うっせえ、良く言われるがこの顔結構コンプレックスなんだよ!この前は小学生に間違われたわ!制服着てんのに!)』

「(……そのルックスが実は上級生に人気なのは黙っておこう、そうしよう)」

四人のバトルロワイヤルで俺が一番最初に脱落した後、「つまんない」という士の一言により対戦はドローで終了された。

いや、颯のアバターと闘い方が想像以上に良かったので個人的にはポイントを渡しても良かったのだけど。

……いや、駄目だ。こんなんじや甘過ぎる。あんなことを颯や那澄に味あわせないと

めにも、もつと厳しくいかないと……。

「いえ〜い!!うちらの勝ちい〜!!いきがってたくせにシユン弱すぎい〜!」

なんかめつちや颯がはしやいでる……ウゼエ、ただひたすらにウゼエ

あと、大声で話すな。喋るなら思考発声で喋れ。周りの連中が何事かそこつちを見るから。

言葉にはしていないがおれの冷たい視線に気付いたのか大声を出すのをやめ、顔を赤く染めながら着席

『まあ、勝つたとは言つても兄ちゃんはアピリティを一つも使つてないから、明らかに本気じゃないんだよねえ〜』

『(……え?)』

『(たしかに、どちらか片方でも使われた時点でうちら、蜂の巣やろうし)』

『(は、蜂の巣!?)』

『(過大評価過ぎるだろ、お前ら。第一、今更そんなこと言つても負け惜しみにしかならねえよ)』

二人の言葉に俺は呆れ気味に言葉を返すが、颯は納得出来ないと言わんばかりの表情を見せる。ええい、鬱陶しい

『(あのな?お前と俺とじゃ戦いの経験値もレベルも全然違うんだから、差があるのは当

然だろ)』

『(あのさあ、話の腰折るようじゃけどええ?)』

『(なんだ?)』

『(レベルって何?)』

『(……おい土、説明しとつけて言つたら)』

『(テヘペロ)』

『(テヘペロ♪じゃねえよ殴るぞ)』

もうやだこの妹、なんでこんな面倒くさがりに成長してしまったんだ。妹じゃなかったら絶対に付き合わないわ。

……でもこれで加速世界では策士でなかなかの実力者だから、人間って分からないモンだよ。

『(ほら、よくゲームとかで経験値が一定値に行くとレベルアップするだろ?そのレベルと一緒に)』

『(……ゲーム苦手だからよう分からん)』

『(そういうえげげだった。お前、何で分からないがゲームにすぐ酔うもんなあ)』

そうそう、颯はゲームとかやるとすぐ酔ったとか言うから、あんましゲーム自体やらないんだよ。

まあ、元々ゲームとかのインドアな事よりもスポーツとかのアウトドアな事の方が好きらしいから関係無いだろうけどな？

『とにかく、お前はまだ始めたばかりのレベル1で、俺のレベルが7だからかなりの開きがあるんだ』

『(たつた6でそんなに差つてできるもん?)』

『(6は6でもたつた6ではないぞ?俺の知る限り、BBの最大値は8だからな)』

『(ふうくん、そこまでレベルつて高くないんじゃないかね。一回レベル8と戦つてみたいわ)』

『(まず勝てないからやめとけ(やめた方が良いよ))』

『(二人同時に言うなあ!!)』

俺と士の思考発生でのツツコミが同時に響く。

いや、あいつらとガチでやりあつたらまず勝てないし絶対にトラウマ植え付けられるから。

撃つたビームが刀で両断されたのは今思い出しても背筋が凍るよ……うん。

『(さて話を戻して、そのレベルの上げ方なんだけどな?BBにはバーストポイントつてのがあつて、これが経験値にもなるわけだ)』

『(また新しい単語が……ん?経験値「にも」ってことは、他にも使うことがあるん?)』

『(颯にしては鋭い。そう、このバーストポイントは加速することの出来る回数も表して

いる)』

『(……具体的に言ってくれんにやわからんのじゃけど)』

『(今からするから待ってる。バーストポイントはBBをインストールされた時点で100ポイントが渡される。んで、加速する度にポイントが1つつ消費されていくわけだ)』

『(え、あ、うん……)』

おい、目を逸らすんじゃないよ目を。ここから結構大事な話になるんだから。

『(さて、ここで一つ問題だ。バーストポイントが無くなったら、一体どうなると思う?)』

『(うーん?ポイントが無くなったんなら、電子マネーみたいにチャージとか?昔のソシャゲ商法みたいで怖いわあ)』

ソシャゲ嘗めんな、その儲けでリーグ優勝したプロ野球チームだっているんだぞ? ……うん、なんか今日はなんか調子悪いわ。変則とはいえ久々に対戦で負けたからか?

ミラの特訓以外だと確か、東京で戦ったんだから……あつ

「そうか……最後の対戦はあいつか……」

『(おーい、シュン〜?声に出てるけー)』

「兄ちゃんー！」

!?!?!び、びつくりしたあ」

急に怒鳴んじやねえよ、突き刺さるような周りの視線が痛いんだって。

……あ、やべえ。今なかなかにもずいこと口走らなかつたか俺？

あんましこの件については突っ込んでほしくはないんだが。

『(兄ちゃん、話ずれてる。時間ないんだから早くして)』

『(え、シユンさん今すごい気になるような事ゆうてたような…?)』

『(なぐんのこゝとかなあゝ?あたしは知らないなあゝ。ほらあゝ兄ちゃん早く早く)』

『(あ、ああ、分かった。……ありがとう)』

『(べつつにいく……)「見返りはジャンポパフェでいいよー」

「調子に乗んな」

「イダア!」

調子に乗って思考発声すら忘れた士におもいつきしデコピンをかます。

うむ、”バチンツ”という音がするくらい凄まじいデコピンだ、我ながら怖いものがある。

『(さて脱線したが、結論から言おう。バーストポイントが0になると、BBを強制的に

アンインストールされる)』

『(……へ? そしたらまたインストールしなおし? なんじゃそれ、めんどくさいなあ)』

『(いや、一回アンインストールされたら、二度とインストールをすることは出来なくなる)』

『(はあ?! じゃあポイントなくさないようにしなきゃいけないじゃん! そんなお金ないで!?)』

『(誰が現金をチャージするなんて言つたよ。ポイントはさつきみたいなの対戦で手に入るよ。まあ、ほんとはまだいくつか方法があるけど)』

「へ?」

予想外の反論だったのか颯の口から間拔けな声が漏れる。

それに対して土と那澄は含み笑いを颯に見せ、俺は少し厳しい顔を見せながら口を開く。

『(明日から俺達がレベルアップを兼ねてお前を鍛え上げる、覚悟しとけよ?)』

「土ちゃんお疲れさま! し、俊弥先輩もお疲れ様です!」

「おつかれー! また明日ねー! ……兄ちゃん、ほら」

「ん？あ、お疲れさま。また明日ね」

「っ！は、はい！また明日！」

そう言った女の子がなんか悲鳴に似た声を上げながら去って行く。いや、悲鳴を上げるならわざわざ挨拶しに近づかなくても……。

「兄ちゃんは女の子の気持ちが分かってないな、そんなだから彼女いないんだよ」

「異性の気持ちを理解しろといわれてもな？てか、彼女いなくても別にいいだろ」

「わーお、開き直りましたよこの兄貴は」

「急に呼び方を変えるな、違和感しかないわ」

放課後、生徒会の活動が無い俺と帰宅部の士は自宅に帰ろうと学校全体共通の正門にいた。

時々二人で並んでいると兄妹と知らない連中は俺達が付き合っているとか言ってるらしいが、俺はこんな面倒くさい奴とは付き合いたくないぞ？

ちなみに何故颯と那澄がいなかったのかというと颯はソフトボールの練習、那澄は定期検査で病院に行ったらしい。

二人ともどうして外せない、と言ったのでBBの話は明日に回す事にした。

あ、那澄は別に重い病気じゃないからな？何年か前は相当酷かったらしいが、今は大分落ち着いてきてるみたいだ。

時間も時間なので帰るか、そう思い歩き出そうとする。

が、突然眼前に直結の警告表示が現れ足を思わず止める。まあ、この状況だと誰がやったのか分かるけどさ。

『(土、急に直結すんなよ)』

『(えー別にいいじゃーん)』

そんな満面の笑みを見せられると追求できないんだが、思わずそう口に出しそうになるのをぐっと堪える。

言葉に出すと確実に調子に乗るからなこいつ、昼が良い例だよ。

直結の状態でそのまま自宅に帰り始めるが、すぐに土から思考発声が飛んでくる。

『(で、今後どうすんの？ 兄ちゃんの希望通り近接系のアバターを颯ちゃんは生み出したけど)』

『(ん？ どうするとは言っても、明日から徹底して鍛えるしかないだろ)』

『(鍛える、ねえ……)』

『(土、お前さつきから何が言いたいんだ?)』

そう言うと土は俺の横から正面へと移動し、普段の感じからは想像できない鋭い目で俺を睨んでくる。

『(はつきり言うけどさ、兄ちゃん弱くなったよね。いや、腑抜けたよ)』

『……どういう意味だ?』

『そのままの意味だよ。東京でレギオンに入ってた頃よりも、ましてやフリーで活動してた頃よりもね』

『そんなことはない。俺はあの頃のままだ』

『(じゃあ、何でさっきのバトルロワイヤルで本気出さなかったわけ? 那澄ちゃんの言っただけに、あたしたちなんか一瞬で蜂の巣に出来たはずなのに)』

『(本気を出す必要が無かったからだ。どの程度の能力なのか確認するために)』

『(わざと負けたって? それこそつまんないよ。加速世界で身体を動かせるっただけで笑顔になってたあの頃の兄ちゃんは何処行ったのさ)』

……全く、反論できない。士の言うことは全て、合っている。

あの対戦の時、全く集中できなかった。理由は、分からない……いや、本当は分かっている。でも、それを口に出したら、俺は――

『(兄ちゃんさ、まさかとは思うけどさ? 颯ちゃんの”色”を見て”あの人”の事を思い出したんじゃないの?)』

『(!?)』

『(明るさの違いはあるとはいえ確かに似ているよね、『群青色』と『瑠璃色』って。カラーチャートでもかなり近いし)』

やめろ……

『確かにあたしも未だにショックだよ？でも兄ちゃんの落ち込みようは尋常じゃないからさ』

やめろ……やめてくれ……

『でも言ってしまうんだけど、明日は我が身かもしれないのに過去の事をウジウジと――』

「やめろっ！」

「きやつー！に、兄ちゃん？」

士の小さな悲鳴が聞こえてくる。

見れば、俺が無意識のうちに士の両肩を力一杯掴んでいた。

我に返った俺は肩から手を離すが、まだ左手には力が抜けずに震えている。

「お前に何が分かるんだっ！あの時、あの場にいなかったお前がっ！」

語彙が思わず荒くなり士をおもいきり睨みつける。

俺は首筋の赤いニューロリンカーからXSBケープルを半ば無理矢理引き抜き、士に投げるように手渡す。

そして手渡した士の顔を見ず、横を通り過ぎながら駆け足で歩いていく。

「……兄ちゃん、ほんとにおかしいよ。あの時、一体何があつたつての？」

何か土が離れる時に眩いたが、今の俺の耳には入らなかった。

Anxiety 不安

重い……体が重い。

俺の体が重いんじゃないやなくて、俺に何かを組み付いている。

上半身を起こし俺の横を見てみれば、布団に一人分の膨らみが出来ている。

溜息交じりで膨らんだ布団をめぐってみると、下着の上に男物のTシャツを着た女性が心地良さそうに眠っていた

決して俺が女性を家に連れ込んだとかじゃない。俺にそんな対象なんて今はいない

「ほら、母さん起きなつて。朝だよ」

「ううん……ああ、俊弥おはよお」

「抱きつかない抱きつかない。うつとおしいから」

「ああん、いけずう」

自分の親ながら、呆れるほどの朝の弱さだこと

俺たち兄妹の母親である風見円（マドカ）はほぼ毎日仕事で帰りが遅く、休日である土曜になると何故かこんな風に俺や士のベッドに潜り込んでくる

そういうえば、母さんがベッドに侵入してくるのは大体隔週で来るはず

先週も俺のどこに来たから今週は士のはずじゃ……まあ、どうでもいいか

「ほら、起きて顔洗ってきなよ。その間に朝飯作つとくから」

「ふあ〜い」

そう言いながら母さんは眠たそうな目をこすりながら洗面台に向かつて行った。

俺も寝起きの重たい身体を引きずる様にベッドからゆっくり這い出し、寝巻きから部屋着に着替え部屋を出る

午前8時ちよつと過ぎ、休日の朝つばらだから士を起こす必要はないんだが……それにちよつと今はなあ

内心そう思いながらも俺の部屋の反対側にある士の部屋の前に立っている俺はなんなんだろうか

「士、起きてるか？今から朝御飯作るけど何か希望あるか？」

『……』

……反応無し、と

あの時軽く怒鳴つてから若干士が冷たい、というよりもこつちを避けてる気がする
流石にこれが続くと母さんに勘付かれるからやばいんだが……

しばらくそつとしておくのが正解……か？

とりあえず自分から出てくることに期待し、キッチンでパンを焼き始める

「あ、今日は真が朝食担当だったっけ？」

「あのさ、さつき言ったはずなんだけど」

「そお〜？へんへんほぼえてないへどお〜？」

間延びした言葉を口にする姿は（童顔も相まって）高校生にしか見えない母さん。食べながら喋らないの、行儀が悪い

俺も自分のパンを皿に乗せて自分の席に座る。

「あれ、土は？お腹空いたらすぐ起きてくるはずなのに」

「うーん……なんか、珍しく起きてないみたい。反応が全然なかったから」

「うっそ〜、あのハムスターみたいなの土が〜？」

「それ、遠回しにハムスター馬鹿にしてない？」

「おはよ」

そんな他愛の無い会話の中、土がリビングに現れる

土のテンションが低いのはいつものことだから気にはならないが、何故か部屋着ではなく私服に着替えて出てきた

面倒くさがりの土は休日の日は部屋着のまま過ごすはずで、着替えてるってことは出かけるのか？

うちは母さんの仕事が忙しいこともあって、休日は何か予定がない限り家族で過ごす

ことにしている

これは数年前に亡くなった父さんの決め事なんだが、父さんが亡くなった今でもこの習慣は続いている。

だからこそ、土が出かけようとしていることに、俺は驚きを隠せない。

やはりこの前怒鳴ってしまったのが悪かったのだろうか？

今まで発破をかけるときに語尾を上げることがはあったが、本気で怒鳴ることは過去にあまり無かった

……母さんがこの空気を察しているのか察していないのか（おそらく後者）、いつも通り笑顔で俺達に話しかけてくるのが余計に心に来る

「何俊弥、土と喧嘩でもしたの〜？」

「母さん、お願いだから場の空気って物を読んでくれない」

「え、なんか変なこと言った〜？」

「なるほど、母さんは今日の晩飯は激辛料理をご所望みたいだね」

「あつ、ちよつ、冗談！ 冗談だから！ お願いだから激辛だけはやめて！」

いつも母さんに対する切札をつかった途端に、母さんの顔が真っ青になる

うちの母さんは辛い食べ物が苦手なのだ。40手前なのに子供舌とはこれいかに

しかし、当の本人は「我関せず」といった様子で、こちらを見向きもしない。

俺と母さんが食べ終わり、一番最後に来た土はゆっくりと自分のペースで食べ続け食べ終わるとすぐに席を立つ。

「ご馳走様でした。ごめんけど今日ちよつと用事出来ちゃったから出かけるね。夕方には帰ってくるから」

「そうなんだ、気を付けて行ってらっしゃい」

母さんの短い言葉を聞き終わると、土はリビングを出てそそくさと玄関へと向かった。一瞬だけ見えた俺に対する土の視線は、明らかに普段の物ではなかった

土が家から出ていき、少しリビングが静かになる。何とも言えない雰囲気だったが、母さんに少しだけ弁明をしておく

「ごめん母さん。ちよつと、土とギクシヤクしちゃってさ」

「……そうかな？お母さんにはそうは見えないけど」

「え？どういうこと？」

「逆に聞いてみるけど、今まで土が怒ったとこ見たことある？」

「無いよ、だからこそ今回は相当頭にきてるんだと思つて」

「土は、そんな子じゃないよ」

「え……」

母さんはそう言いながら、食器を流し台へと持つていく。

そしてこちらを見ずに、いつもの語尾を伸ばしたいいつもの口調ではない、はつきりとしかし優しい口調でこちらに語りかける。

「士は、自分は傷ついても周りは絶対に傷つけない子だよ。そんな士があんな態度をとるってことは、何か考えてるんだよ。考え、というよりは、決意かな？」

「決意……」

「ま、そこは経験値の差だよ。伊達に10年以上システムエンジニアしてないよ」
そんなことを言うと、母さんはそのまま鼻歌を歌いながら洗い物を始めてしまった。母さんが鼻歌を歌っていると、作業やら仕事が終わるまでこつちの話を聞いてくれ。

つまりは、この話は終わり……ってことか。

そう解釈した俺は食べ終わった食器を母さんの横に置き、自分の部屋へ戻りベッドに寝転がる。

自分が傷ついても、周りは絶対に傷つけない……か。BBでの『防御特化デュエルアバター』ってのは、そこへ繋がるの……か？……考えても無駄か。

そう自分の中で結論付けた俺は、さっきまでの事を忘れ去ろうとするかのようにBBでの俺の愛銃『ブラフマー』を組みなおすことにした。

しかし頭からさっきまでの事を忘れることが出来ずに少しだけ調整をした後すぐに投げ出し、その後も何をしようとしてももやもやし、結局何もせずに週末を過ごしてし

まった。

G l o o m y 陰鬱

窓際の席に座っている俺は特に何も考えず、窓の外を眺めていた。

梅雨時ということもあり、窓には大粒の雨が止めどなくぶつかっている。

視界の端にはニューロリンカーからの注意報通知が上がったままだ。

土日を過ぎ、再び月曜になり心新たに……といきたい所だが、俺の心情は今の空模様のように曇り切っていた。

決して一限目の体育がなくなりそうだからとか、そんな理由じゃない。

どっちにしる俺は持病のせいで激しい運動は出来ないので自ずと見学になるわけだし。

理由は簡単、妹の士の事だ。

結局金曜の一件以来殆ど口をきいていない。

拳句の果てにいつもは一緒に登校しているにも関わらず、まさかの同伴拒否ときた。

なるべく早く収束してくれるとこちらとしてはありがたいのが……。

そんな考えを巡らせているとクラスのホームルームが始まり、現実へと引き戻される。

真面目に話を聞いていなかったが、どうやら一時間目の体育が雨で中止になったらしい。

前の席に座っている野球部の男子や、隣に座っている女子は露骨に残念がっている。体育が中止になったことくらいでここまで残念がれるものなのだろうか？

中学生とはいえ、その辺りはまだ“子供”なのだろうか？

「子供か……」

思わず口からこぼれた声は、激しい雨の音でかき消されていた。

何時からだろう、自分が周りとは“違う”ということに気づいたのは。

決して容姿が優れているとか、異常に頭が良いとかでもない。

ただほんの少し、同年代の子供よりも身体が弱かっただけだ。

だがそんなたった一つの事柄が自分の世界を客観視することに繋がった。

小学校に進学してからが特に顕著で、知らず知らずのうちに同級生達との距離感すら感じるようになった。

——皆は出来るのに、何故僕には出来ないのだろうか。

そのように考えることが増えていった。

そんな頃だった、俺がバーストリンカーになったのは。

最初は自分の身体を思った通りに動かすこと自体に戸惑いがあつたが、そのうちそんな戸惑いを忘れるほど加速世界にのめり込んだ。

そうしていくうちに、少しずつ俺は変わっていった。

『加速世界と現実では進む時間が1000倍違う』

そんな育ての親からの忠告すらも無視して俺は加速を続けた。

それが自分の精神に影響するなんて、そんな深く考えもしていなかった。

ほんの少しだけ進んでいた俺の中の時計は、周りとはさらにかげ離れた時を示すようになった。

後悔こそしてはいないが、我ながら馬鹿だったと今では思う。

士達にはBBのレベルを簡単に上げさせないようにしているが、それが理由だ。

まあ、士はかなり不満を溜め込んでいるようだが、あいつらに俺と同じ様にはさせたくない。

『ここは、僕が僕としていられる、本当の居場所なんだ』

本人が分からなくなつたとしても、大切だったものが無くなるというのはあまりにも大きすぎるのだから。